Sword Art Online ～断片ノ背教者達～

????

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０２７年　某日――――アルヴヘイムの地下ダンジョンであるヨツンヘイム内に巨大な高難易度ダンジョン、ギンヌンガガプの門が発見された。

そのダンジョンの難易度たるや、サラマンダーの特大レイドパーティが数分で壊滅するほどだった。

闇妖精族の短剣使い、ゼロと火妖精族の斧使い、ジャック率いるギルド「フラグメンツ」はＳＡＯ時代からある少数ながら一パーティでフロアボスを討伐出来るほどの強豪ギルド。

そんな「フラグメンツ」も例に漏れずギンヌンガガプの門攻略に乗り出していた。そんな彼らを待ち受けていたのは・・・？

※処女作で文章も拙く、遅筆です。また、オリキャラも多数登場致します。原作の設定にできるだけ忠実にプロットを組んでおりますが指摘等ありましたら教えて頂けると幸いです。

目次

第一章
序章 ―― 1
神話級ノ試練 ―― 3
世界ノ警告 ―― 10
断章Ⅰ ―― 17
始動スル背教者達 ―― 20

第一章
序章

――――なんという、なんという壮大さなのだろうか。
目の前に聳え立つ高さ数百メートルはありそうな巨大な門の前で僕を含むギルド「フラグメンツ」のメンバー達は揃って絶句していた。
「なんつうでかさだよ・・・」
隣にいる男も同じことを思ったようだ。
燃えるような赤い髪を後ろで纏め、ガタイのいい体を純銀に輝くプレートメイルで覆っている。豪傑という文字がピッタリはまりそうなこの男の名前はジャック。ギルド「フラグメンツ」のサブマスターで、僕のＳＡＯ時代からの相棒だ。
そんなジャックも今だけは巨大な扉を見上げて呆けた面をしている。
後ろで先程から一言も話さないメンバー達も同じことを思ったのだろうか。
「恐らくこれが例のダンジョンなんだろうなぁ」
誰にともなく呟く。
僕達が今いるのは妖精の国アルヴヘイムの地下に広がる邪神級モンスター蔓延る闇と氷の世界、ヨツンヘイム。
天蓋までの高さが一番高い所で五百メートル超もあるため、現実世界では有り得ないサイズの巨大な構造物が散見できるこのフィールドでさえかつてこれ程に巨大な何かを僕は見たことが無かった。
まるで先にある何か大切なものを守るかのように巨大な扉はその口を閉ざし、扉には大きな泉を守る白い大蛇のレリーフが刻まれている。
それはまるで挑戦者を誘うような、それでいて阻むような矛盾した雰囲気を放っているようだ。
それ故に、この先に何があるのだろうという好奇心も湧いてきた。

僕はここへと到達する前に手に入れていた青白い燐光を放つ鍵を取り出し、若干の興奮と共にその巨大な門にそぐわない小さな鍵穴へと差し込む。
ゴクリと息を飲む音が聞こえる。
巨大な扉は侵入者を中へと通すまいと抵抗をするかのようにゆっくりと、しかし確かな速度でその重々しい口をほんの少しだけ開けてゆく。
「じゃ、攻略開始だな。」
自分にも言い聞かせるようにして開いた隙間へと歩を進めてゆく。
「よし、行こう。」
暫く固まったままだったジャックが進み始めると共に同じく固まっていたメンバー達も次々と歩を進めてゆく。
かのデスゲームの５０層迷宮区でフロアボスと相対した時や、７５層の迷宮区の入り口に立った時に感じたものと同種の圧力を感じる。
死の危険のない普通のゲームではそんなものはもう感じないだろうと思い込んでいた僕自身に冷水を掛けられた気分だ。
いや、恐らく後ろで黙って付いてくるメンバー達も同じことを思っていたに違いない。
それもそのはずだ。ここは１週間前に発見された超高難易度ダンジョン、「ギンヌンガガプの門」、その入り口。
――――――サラマンダーの大規模なレイドパーティですら数分で壊滅した地獄のその入り口なのだ。

神話級ノ試練

アインクラッド第３７層はフィールド全体が森に覆われた緑の国だ。フィールド中央に設置された巨大な湖からは放射状に川が広がり、その一つ一つがダンジョンや街へと通じている。

いつもは一面緑に覆われているこのフィールドも、今は赤や黄色の紅葉に彩られている。

現実世界も９月の半ばに差し掛かり、季節は秋に差し掛かっているが、年々温暖化が進んでいるため、まだ紅葉は東北近辺でしか見られないので、中部地方に住んでいる僕が紅葉を楽しめるようになるのはまだまだ先になりそうだ。

しかし温暖化の波もゲーム内には及ばず、一面紅葉に覆われているこの時期のフィールドではモンスターがほとんど出現しないため、紅葉目当ての観光者もしばしば見受けられる。

そんな紅葉色づく森林を抜けた先にある小高い丘、そこにギルド「フラグメンツ」はギルド本部を構えている。

小規模ギルドが本部とするには少し大きめの、中世スイスの民家を思わせる家で、１００平米を大きく上回る土地に木造５階建てとなかなかの豪邸である。

実は、フラグメンツがこの地にギルド本部を構えたのはつい先日の事で、それまでは世界最大の都市、王都アルンの中心街にある石造りの豪邸に本部をかまえていた。

しかしこの層に観光に来た時にこの家から見える美しい景色と家の外観に一目惚れして即座に購入ウィンドウのＯＫボタンを押してしまった。

・・・そして後から会計のシャドーに怒られたことは記憶に新しい。

「おいゼロ、これ見てみろよ」

机の隣で熱心にブラウザ窓から何かを見ていた小柄な男が話しかけてきた。

所々にピンと跳ねた癖っ毛がある黒のショートヘアー、その上から

生えた三角形の大きな耳は、猫妖精族（ケットシー）の証である。少し黒みがかった肌に髪と同じ色をした艶のある黒目を光らせている。
彼の名前はダン。
彼も、と言うべきかフラグメンツに所属するメンバーの殆どはＳＡＯ時代からの付き合いになる。当然、ダンもＳＡＯ時代から加入しているメンバーの１人だ。
彼はウィンドウをこちらに向けながら好奇心旺盛そうな猫妖精族特有の大きな目でこちらをじっと見てくる。
僕は開いていたタブを保存してから一括消去し、ダンが差し出してきたウィンドウをのぞき込む。
予想していた通り、表示されているのは国内最大級のＶＲＭＭＯＲＰＧ（仮想大規模オンライン）情報サイト、「ＭＭＯトゥモロー」のニュース記事だった。ページカテゴリはＡＬＯ、つまりこの世界の情報だ。
記事内にはアルヴヘイムの下層にあるフィールド、ヨツンヘイムと思われる緑に覆われた遺跡の廃墟が映し出されたスクリーンショットが載せられていた。
ヨツンヘイムは元々、薄闇に覆われた恐るべき巨大な人型の邪神級（じゃしんきゅう）モンスターが支配する闇と氷の世界であった。
しかし、２０２５年の末にカーディナル・システムに搭載されていた「クエスト自動生成機能」の暴走によって起こったとある大事件により、一面緑に覆われたフィールドに包まれてしまったのだ。
そのヨツンヘイムが映し出されたスクリーンショットが掲載されているということは、大方また新しい遺跡が見つかったと言ったような新規クエスト発見のニュースであろう。
僕はそのまま記事のリード文に目を落とす。
そして、僕は驚愕に見舞われた。
【カグツチの環（わ）全滅!?!!高難易度神話級（レジェンダリィ）クエスト「ギンヌンガガプの門」発見される！】
「おいおい、マジかよ・・・」
「カグツチの環」と言えば、最近になって発足された炎妖精族（サラマンダー）のユージーン将軍率いる４８人構成の精鋭部隊である。

邪神級モンスターすらほぼ無傷で葬り去る程の強さを持つ、現在ＡＬＯ内最強と言っても過言ではないレイドパーティが全滅したというのならそのダンジョンの難易度は現行の最難関ダンジョンを大きく上回ることになる。
「カグツチの環ですら数分で全滅か・・・
う――ん・・・これは僕達には無理じゃないか？」
僕は低く唸った。
一方ダンは、期待に目を光らせながら言った。
「誰もクリア出来ないと思われているダンジョンを小規模精鋭が攻略する・・・燃えないか？」
僕はこめかみを抑えた。こうなったダンはもう誰にも止められない。
「シャドーちゃんはどう思う？」
仕方が無いので奥で何やら熱心にユルドの計算をしている風妖精族（シルフ）の少女に話を振る。
「ボクは行ってもいいと思うよ～？」
艶のある銀髪を頭の両側で結わえて垂らし、透明感のある白い肌に深い海を思わせるぱっちりとした青い目。
どことなくふわふわした雰囲気を纏うこの少女の名前はシャドー。ギルド内では主にユルドの管理やアイテムの分配などの取り仕切りをしている。
シャドーも一応は賛成派のようだ。
多数決を取ろうかと思ったがリアルでは今は明朝にあたる時間帯だ。よって殆どのメンバーはログインしておらず、今この場にいるのはダンとシャドーとこの僕だけだ。
「仕方ないなぁ・・・」
僕は渋々スケジューラーから予定を引き出す。
「今週の日曜日ならみんなの都合が合いそうかな・・・？」
「ボクは大丈夫だよー。」
「俺も日曜日なら２４時間いつでもおっけーだ。」
２人は口々に言うが、この２人は基本的に常時ログインしていて、

いつでも暇そうなので放っておく。
僕は左手を横に振って先程まで開いていたウィンドウを開き、そこから外部メッセージタブを引き出して素早くメッセージを打ち込んでから送信した。
新ダンジョンに乗り込む時はいつも誰かがトラブルを起こすのであまり乗り気では無いのだ。
まぁ最近は素材収集系のクエストばかりやっていて、いい加減飽きていたところだったので気分転換には丁度いいのだろう。
そんな言い訳じみた事を思いながら、ふと視界右端に表示されている時計を一瞥した。時刻は午前5時を少し回ったところだった。
「もうこんな時間か、ごめん、もう落ちるね。」
僕はウィンドウを出し、ログアウトボタンに人差し指を乗せた。そのままOKボタンに触れる。
「おつかれ～」
「またな～、ゼロ!!」
2人の呑気な声が次第に遠ざかる。周囲の風景も徐々に虹色に包まれてゆき、そしてブラックアウトした。
そして闇妖精族（インプ）、ゼロとしての肉体感覚が薄れてゆき、最後に一瞬の浮遊感が訪れ、消えた。

※※※

僕はゆっくりと、瞼を開けた。見慣れた自室の天井。続いて壁に貼った来期アニメの大きなビジュアルポスターが目に入る。
ゆっくりと息を吐き出しながら僕は両手を頭に回してゆっくりと円冠状の機械「アミュスフィア」を外した。
数ヶ月前に出たばかりのこの「アミュスフィア2」は、前世代の安全機構を受け継ぎつつ初代機、「ナーヴギア」の様なクリアーな接続感を追い求めた、レクトプログレス発売の新型のフルダイブ型VR（仮想現実）機械である。
僕はそれを壁にかかったラックに乗せ、ベットから上体を起こし、

ベットからのそのそと這い出た。
ふと目をやった部屋の隅に立てかけてある大きな姿見に自分の姿が映る。
仮想世界の中でのゼロより幾ばくか細めの体。身長は１７０を少し過ぎたくらいで、少しウェーブがかった黒髪に一重瞼の目。
これが現実世界の僕、戸崎零桜の容姿だ。
仮想世界のアバターは旧ＳＡＯサーバーに残っていたものをＡＬＯにコンバートしたものなので容姿はほぼ同じなのだが、２年半運動をしていなかった分こちらの方が痩せている。
まぁ知能派の闇妖精族と言うのならこっちの姿の方がイメージ的にピッタリなのだが・・・
そんな事を思いながら寝巻きからジャージに着替え、昨日の夕食の残りで簡単に朝食を済ます。
ＳＡＯ帰還後、勉強だけは人１倍出来た僕は市外の進学校へ苦もなく編入することが出来た。
その際に今後の進路のことも考えて両親に一人暮らしをしたいと申し出た。始めは反対していた両親も、最後には成績の定期的な報告などを条件に了承してくれた。
そんなこんなで一人暮らしを始めて約２年半が立つが、父親が大手企業の上層部に勤めているため、月２０万以上の仕送りを受けて高校生としてはかなり裕福な生活をしている。
――――まぁ流石に今のように勉強もバイトもせずにＡＬＯに長時間ログインし続けるのはやりすぎたと思っているが。
すっかり空になった皿を暫し見つめたあと、それを片付けてから昨晩からずっと開きっぱなしだったデスクトップのパソコンの前に腰を下ろす。
そこからブラウザを起動させ、お気に入りタブからとあるサイトを呼び出した。
「ぶいそく」の愛称で知られるそのサイトは正式名称を「ＶＲＭＭＯ情報まとめ速報」といい、広がり続けるＶＲＭＭＯ世界の様々な情報を掲示板やＳＮＳから抜き出し、まとめられたものが掲載されている。

右手の指先で３Ｄマウスを操り、新着ニュースから目当ての情報「ギンヌンガガプの門」についての記事を探す。そして数秒後、容易に見つかったそれはやはりトップニュースを飾っていた。

記事を１通り読み終えたあと、ページ下部のコメント欄へ目を移す。

コメント欄では突然発見された神話級クエスト――神話の固有名詞を冠するクエストのことだが――、の出現でかなり荒れていた。僕はそれを上から流し読みした。

――ギンヌンガガプって神話上では世界の創造の前に存在していた巨大で空虚な裂け目ってやつだろ？

――そうそう、でもそんな大仰なダンジョンの割にはたったの４層構成らしいな

――４層だけだが記事ちゃんと読んだか？相当のクソ難易度。旧運営体の世界樹並だぞ

――それってクリア出来ないってことだろ。キークエも無しか？

――だから記事読めってｗその名の通りグランドクエスト挑戦のための鍵が貰えるクエストだけ

――やっぱ誰かが攻略すんの待つしかねーなこれ、カグツチさん再挑戦オナシャス!!

――結局サラマンダーかよｗ

――・・・・・・・・・・

他のサイトにも飛んでみたが、ユーザー達は突然の神話級クエストの追加で混乱しているらしい。

それもそうだ。運営のアナウンス無しに神話級クエストが追加された例はシステムの予期せぬ暴走によって出来たエクスキャリバー獲得クエスト、ただ１回のみなのだから。

ふと時計を見ると、６時半を回っていた。

僕は少々急ぎ気味で制服に着替えて、用意してあった荷物を掴んで

家を出た。
外に出ると、この時代では珍しい旧式の電子錠で深緑色のドアに鍵を掛け、僕は慌ただしく学校へと向かった。

世界ノ警告

自宅付近にある駅前のロータリーでバスを降りると、空はぼんやりと薄暗くなり始めていた。

通学鞄から手帳型のケースに収まった携帯端末を取り出して時刻を確認すると、デジタル数字は午後５時４０分を指していた。

今日の日没時間が午後５時５８分だったので、日没までには家に帰れるなと確認し、自宅の方向へと歩き出す。

少し急ぎ目の足で１０分程歩くと、見慣れたアパートが見えてきた。

名古屋市千種（ちくさ）区の西方、区役所から徒歩５分圏内にある築３０年ほどのアパート。零桜はその１室で生活をしている。

壁は年季が入っており所々老朽化（ろうきゅうか）しかけている部分も見られるが、一人暮らしをするには十分な広さがあり家賃も格安であるため、僕からすればなかなかの良物件だ。

所々ひび割れているコンクリートの階段を上り、３つ目のドアの前に立つ。

制服のポケットから取り出した旧式のシリンダー錠――――今どき電子錠でない家は珍しいのだが――を鍵穴に差し込み、扉の右側にある小さなパネルに人差し指を乗せる。

赤いＬＥＤランプが点滅しているのを確認して鍵を捻ると、かち、と小さな金属音が響いた。

玄関に入り、音の無い声でただいまと呟く。もちろん返事は無いがこの一言で家に帰ってきた実感が湧くものだ。

中からドアに鍵を掛け、靴を揃えてから数歩進むと家の主が帰ってきたのを察知した家の管理システムにより、玄関からキッチンに掛けてをＬＥＤ電球の光が照らす。

玄関を入ってすぐ目の前に６帖程のキッチン付きのダイニングルームがあり、手前側にはユニットバスの浴場があり、西側の壁には自室へと続くドアがある。

僕は夕食のためにコンビニで買ってきた惣菜(そうざい)やら何やらを冷蔵庫の空きスペースに押し込めてから自室へ入ると、溜息(ためいき)を吐きながら鞄を下ろした。

ベージュのフローリング貼りの床に青い円形のカーペット。ウッドフレームのやや大きめなベッドは濃いダークブラウン。

部屋の奥を見ると同色で統一されたＰＣデスクにライティングデスク。５００冊は本が入ろうかというスライド式の本棚には一昔前のライトノベルが所狭しと並んでいる。

壁にはアニメのポスターが整然と貼られており、左手側にある大容量のクローゼットの半分をアニメグッズの詰まった大きなガラスケースが占めている。

しばしアニメグッズなどを眺めた後、帰ってからずっと着たままだった制服を脱ぎ、浴室へ向かった。

軽くシャワーを浴びてから部屋着に着替えると、コンビニで買ってきたもので手早く夕食を済ませてから自室へ戻った。

ベッドで横になり1時間ほど仮眠を取ろうか迷っていた時、ぴこん、という電子音が響き、僕は音の発生源の方を向いた。

つい最近新調したばかりのデスクトップ型ＰＣの右下にメールの着信を知らせる通知が出ていた。僕はＰＣデスクの前に移動すると通知から直接メーラーを開いた。

親からの仕送りやちょっとした小遣い稼ぎなどで得た金を1年近く溜め込んでようやく買うことのできたこのパソコンは７０万円の高値に釣り合う破格の性能を有している。

回転型記憶装置(HDD)の後継種、個体型記憶装置(SSD)の更に後継種であるＭＲＡＭという超高速不揮発(ふきはつ)メモリを２３ＴＢ搭載しており、中央演算処理装置(CPU)に至っては５１２コア１０２４スレッドという一昔前の巨大サーバー用コンピュータのレベルに達している。

そのため、メーラーやビューワ、ブラウザはもちろんの事、最新の８Ｋ解像度の３Ｄゲームですら体感出来るラグは発生しない。

一昔前まではあった起動シークエンスをすっ飛ばして一瞬で立ち上がったメーラーに、先ほど受信したばかりのメールが表示された。

そのメールには、件名が無く送信者も未設定になっていた。本文には《ＮＡＣ２４―７２５１，６０１５，》という奇怪な英数字が並び、１枚の画像が添付されていた。

ウイルス等を警戒して、添付されてきた画像ファイルをセキュリティソフトに掛けてからビューワで開く。

添付されていたのは１枚の３Ｄ地図だった。標高差のある山脈に廃墟の様な構造物が乱立している。現実には無いような構造物の形状が、現実世界ではなく仮想世界の地図であることを如実に表している。

僕はここまで見てようやく本文の英数字の意味を悟った。ＮＡＣ（ニューアインクラッド）２４、つまり新生アインクラッド２４層、そして後に続く数字は恐らくその場所示した座標であろう。

このようなメールが送られてくるのは珍しいことではない。大規模なギルドでは情報の伝達等にメールで場所を送り付け、呼び出して直接伝えるという方法をとることもしばしばあるそうだ。

後者の方は僕には全く無関係な話なので置いといて、恐らくこれは果たし状か何か、少なくとも送信者が個人であることは間違いない。

と、そこまで考えたところで文章の下部に不自然な空白があることに気づく。文章があの座標のみだったら、下端のメニューバーが見切れるはずが無い。

零桜はその不自然な空白部分を選択し、右クリックで色調を反転させた。すると、予想通り黒い背景に白い文字で何かが記されていた。刹那（せつな）、その文字を見て絶句した。５秒程そのアルファベットの羅列の意味を理解出来なかった。それほどの衝撃が僕を貫いていた。

「どうして・・・、どうしてあの男が・・・」

次の瞬間、零桜は壁に掛けてあったアミュスフィアを掴み取り、ベッドに仰向けになった後それを頭に引っ被り、早口で「リンク・スタート」と唱えた。

体に掛かっていた重力と、反発性の高いクッション素材が僅かに体を押し返す感覚がふっと消滅し、僅かな浮遊感が訪れる。

次いで少しの減速感がやってきて、つま先から柔らかな絨毯（じゅうたん）に触れ、降り立つ。仮想の体にしっかりと五感が調節されるのを待ってから僕はゆっくりと瞼（まぶた）を開けた。

見慣れた木目調のテーブルに大きな煉瓦（れんが）造りの暖炉。広々とした部屋の片隅には数千冊は本が入ろうかという大きな書庫スペースが備え付けられている。

インプの仮想体《ゼロ》として出現したのは先日ログアウトした座標――――新生アインクラッド３７層にあるギルド本部のリビングスペースだった。

他にプレイヤーがログインしていないことを確認しつつ、ウィンドウを開き３７層のマップを表示させる。自分を示す緑色のカーソルをタップすると詳細プロパティが開き、現在位置の座標がポップアップされる。数字は（４８２５，２７５６）。

ＡＬＯの座標表示はフロアの北端と南端、西端と東端それぞれの接線を四方とした北西端を原点とし、数値はメートル単位。

さらに新生ＳＡＯ内での座標は外周部の最も大きい第１層を基準とする全層共通となっているので、現在ゼロのいる場所は１層の最西端から東に約４．８キロメートル、最北端から南に約２．７キロメートル進んだ位置となる。

つまりあのメールに記されていた座標はこの層で言うと現在地から東に２４２６メートル、南に３２５９メートル進んだ位置。マップから推測するに丁度この層の主街区に当たる位置だ。

つまり目的の場所はその主街区のピッタリ真下にあるということだ。

僕の記憶が正しければ２４層の主街区もこの層の主街区――――シースレイとも座標的にはそう離れていない位置にあったはずなので、１度主街区へ行ってから転移門で降りた方が良さそうだ。

そこまで考えてからマップを閉じて装備欄を開き、右下にあるショートカットアイコンを素早く２度タップする。

薄いインナー１枚だった僕の体を包み込むように足、胴、腕、と瞬発力を重視した薄いプレート装備が実体化していく。

その上から裾の長い漆黒の外套が全身を覆う。最後に腰に主武器である黒白の一対の短剣――伝説級武器(レジェンダリーウェポン)《聖剣デュランダル》の頼もしい重みが伝わる。

ウィンドウを閉じてロビーから外へ出ると、外はもう完全に日が暮れた後だった。目の前に広がる湖面はきらきらと月の光を反射し、その奥では静まり返った夜の森が濃密な闇を作り出している。

暗視効果のある支援魔法のスペルワードを一息で詠唱すると、仄(ほの)白い光の波動が広がり体全体を包み込んだ途端、すっと視界が明るくなった。

最後にもう1度マップで方角を確認してからゼロは翅(はね)を広げ、ふわりと浮き上がった。東南東の方角を見据え、一際大きく翅を鳴らすと、そのまま主街区へと一直線に飛び立って行った。

２４層主街区の転移門から転移門広場に降り立った僕は、もう1度マップを表示させ、先程同様に現在地の座標を確認する。

やはり目的地はここからそう離れていない位置のようだ。ウィンドウを素早く閉じると、僕は再び翅を広げ、目的地の方角へ飛び立つ。

アインクラッド２４層は鋭い岩石地帯に覆われた岩山の国だ。

標高差のある大小様々な岩山が聳え立ち、中には上層の底にまで達するものもあり、そのそこかしこに岩山から切り出されたのであろう石造りの都市遺跡が点在している。

その切り立った岩山と遺跡群の間を塗って2分程低空飛行を続けていると次第に視界が開け、なだらかな平地地帯へと入った。

送られてきた座標は恐らくここだ。僕はゆっくりと荒地に降り立ち、詰めていた息を吐き出した。そのまま辺りを見回していると――

『久しいな、ゼロ君。また君とこうして話が出来るとは思っていなかったよ』

不意に、どこか遠くから響くような錆(さ)びた声が聞こえてきた。

「こっちもです。まさかあなたが生きていたとは思いもしませんでしたよ。ヒースクリフ・・・・・・いや、茅場晶彦さん」

そう、あのメールの末尾に書き込まれていた名前は

《Ｈｅａｔｈｃｌｉｆｆ（ヒースクリフ）》。
　つまり、あのメールの送り主はかつて浮遊城アインクラッドという電子の牢獄に一万人を閉じ込め、約四千人の命を奪った最凶最悪の事件――ＳＡＯ事件の首謀者、茅場晶彦だった。
『生きている・・・・・か。そうとも言えるしその逆もまた然り。今の私は茅場晶彦という意識のエコー残像――言わば思念体という存在でしかないからね』
「キリトの言っていたとおり、分かりにくいことを言う御方だ。それで、今更になってどうして僕をここへ呼び出したんですか？」
『うむ。それを話す前に幾つか話さなければならない事がある。君はこのＡＬＯがＳＡＯのコピープログラム上で動いているということは知っている筈だね？』
　無言で頷く。このＡＬＯというＶＲＭＭＯはそもそも妄執に取り憑かれた須卿伸之という男が旧ＳＡＯプレイヤーの一部を拉致し、自らの研究の実験台とするためにＳＡＯのサーバーを丸ごとコピーして作り上げたものだったはずだ。
『オリジナルのカーディナル・システムには《世界の種子（ザ・シード）》には行使できない幾つかの権限があってね。その中でもカーディナル・システムには１度しか行使できない特別な権限があった。それが――』
「ワールドマップを全て破壊し尽くす命令と、それを行使するための権限・・・ですよね？」
　茅場の言葉を切るようにして僕は続ける。
「アインクラッドクリア時に未踏破だった第７６層から第１００層までの全２５層、それはどうなったんだろうと考えたことがあります。茅場さん、あなたは第一層でのチュートリアルであの世界を創り出すことが最終的な目的だったと言いましたよね？」
　自分の考えを確かめるようにゆっくりと語る。
「その言葉が偽りで無いのなら、住民――プレイヤーが全て解放されて誰もいなくなった世界はあなたが望んだ世界ではない筈だ。そしてその逆、攻略が完全に停滞した世界も。だからそれは消滅させるしかない。それがその権限が存在している意味・・・そうでしょう？」

『・・・・・・・・・・』

僅かな苦笑が漏れる気配。

『そこまで勘づかれてしまっていたか。キリト君と言い君と言い、私は少々君達を侮りすぎていたのかもしれないな。』

そのまま茅場は口を閉ざした。暫く無言の時間が続いたが、やがて茅場は再び言葉を続ける。

『・・・・・・そう、君の推測通りカーディナルに与えられていた命令――《終末局面（ターミナル・フェイズ）》には本来全階層の踏破時と攻略の完全停滞と共に発動し、全てのマップを消去させる権限が含まれていた。もっとも75層でキリト君が私の正体に気づいた時点で多少の改変はあったのだが。』

これには僕も苦笑を返す。

『《終末局面》には二つの段階がある。全階層の踏破により命令が実行された場合は最終段階――全マップの消去が即座に実行されるのだが、攻略の完全停滞、若しくはコンソールからのコマンドにより命令が発動した場合、中間段階を踏んでから最終段階へと移ることになっている』

「中間段階・・・プレイヤーの攻略の意思を試すイベントクエストの生成と言ったところでしょうね」

『如何にも。前置きが長くなってしまったね。ここからが本題だ。私が世界の終焉と共に凍結し、三年間もの間再び実行されることは無かったその機能が先日何者かの手によって実行され、《終末（ターミナル）クエスト》が生成された』

ここまで来て僕は彼が言わんとしていることを確信した。そして、何も無い、だが彼がいるであろう場所をじっと見つめる。

不意に、僕は見えるはずのないかつての血盟騎士団団長――ヒースクリフの悠然と構える姿を幻視した。

幻影のヒースクリフは、かつて何度も見たあの謎めいた微笑を顔に滲（にじ）ませながら告げた。

『生成されたクエストの開始点は《ギンヌンガガプの門》。君達にこのクエストを攻略して貰いたい』

断章Ⅰ

吸い込まれるような闇と深い静寂が辺り一帯を覆い尽くす中、体の芯が凍りつくような冷気に包まれて、少女はただ一人暗闇の回廊の中に倒れ臥(ふ)していた。

堅く冷たい床に投げ出された四肢(しし)は地面に縫(ぬ)いつけられてしまったかのように微塵(みじん)も動かせる気配がなく、鋳溶(いと)かした銀を直接流し込まれるような痛みが途切れることなく少女を苛み続けている。

今にも消え入りそうな朧気(おぼろげ)な意識の中、少女は既に自分が記憶の大半を失ってしまったことを知覚する。

そしてこうしている今も尚、積み上げた記憶の塔が風雨に蝕(むしば)まれ、ゆっくりと、しかし着実に消滅への道を辿っていることも少女は幽かに感じていた。

何か・・・・・何か大切なものを忘れている気がすると、薄れゆく最後の自我がそう訴えかけてくる。

しかし、その「何か」を推し量る術は少女にはない。少なくとも今は。

――・・・・・・を・・・・・・・・・・・・・・・ければ・・・・・・・・・

どこからとも無く声が聞こえた気がした。消え入りそうな、しかし明確な意思を感じる声。

それは誰の声？・・・・・・・それは自分の声。

――このままじゃ・・・・・・・・・・・・・消え・・・・・・・・

不意に、ずきん、と右目の奥に痛みが走った気がした。

――なんで・・・・・・・・・・・・・私は・・・・・・・・・

ずきん、と再び右目の奥に鋭い痛み。

それは、自分に対する警告のようにも思えた。

――・・・・・・である・・・

――・・・・・・・・という事は・・・

――アハハハハハハハハハハハハハ

自分ではない誰かの笑い声や、上手く聞き取れない途切れ途切れの会話。それら断片的な記憶がフラッシュバックする度に、周期的な痛みがずきん、ずきん、と少女の右目を貫く。

――こんなの・・・・・・・間違ってる・・・・・・・

次第に声は声色を聞き取れるほど鮮明になり、それと同時にいつしか右目は灼熱の塊と化していた。

それまで少女を苛んでいた全身の痛みすら、無かったものと思えるほどの激しい痛みの流れが右目から頭の芯にかけてその奔流を迸らせる。

――だから、私は・・・・・・・・・・・・・・・

視界が真っ赤に染まり、その奥に何か文字のようなものが渦巻いている気がした。

しかし、続く痛みに何も考えられなくなる。そして続く声は耳鳴りへと変わり――――

限界を迎えて意識を手放した少女。彼女が最後に見た景色、その文字の意味を知るものは今はまだいない。

――視線の先に円弧を描いて廻る、【ＳＹＳＴＥＭ　ＡＬＥＲＴ　：　ＣＯＤＥ８７１】の文字を――――

始動スル背教者達

夜の空を飛翔(ひしょう)してきたゼロがイグドラシル・シティの門を潜り抜けて広場の土を踏んだ時、空は既に白み始めていた。

慣れた動作で翅を仕舞ったゼロは目的地へ向け、週末の深夜ということもあってか普段より多くのプレイヤーが行き交う通りを歩き始める。

五、六分ほど歩くと視線の先にイグシティの中央街が見えてくる。

このまま進めば先日のアップデートで実装されたばかりの迷宮(クエスト)の入り口へと辿り着くのだが、そこへは向かわずに枝分かれした小路へと入っていく。

そのまま更に十分程度歩き続けたあと、ようやくゼロがその歩を止めたのは一軒の職人用プレイヤーホームの前だった。

基礎となる一階は頑丈な石造りとなっていて、簡素な白塗りの二階がそれに積み重なるように建っている。

目の前には《ｃｌｏｓｅｄ》の木札のぶら下がる木製の両開き扉があり、その横に申し訳程度に店名を表す小さな看板が立てかけられている。

アルファベットで《Ｓｏｌｔ，ｓ　Ｃｒａｆｔ　Ｓｔｕｄｉｏ》と書かれたその看板を一瞥すると、ゼロはロックが掛かっている筈の両開き扉に手をかける。

すると、ゼロがこの工房の家主であるソルトのギルドメンバーであることを認識したシステムにより一時的に扉のロックが解除された。

ゆっくりと中へ入ると、プレイヤーホームとしてはそこそこの広さを誇る店内に所狭しと並べられた多種多様な武器や防具が目に入ってくる。

目を凝らすとその武具一つ一つが仄かに朱く発光しているのが分かる。これは鍛治スキルを完全習得したマススミスによって作られた《定冠級(アーティクルウエポン)武器》である証だ。

暫しその美しくも力強い武具に魅入っていると店の奥にある簡素な木組みの扉の向こう側からキン、キン、と澄んだ金属音が聞こえてくる。
ゼロは音のする方へと進み、音の源――――店に併設された作業用工房へと繋がる扉を開ける。そして中を覗くと、如何にも工房然とした光景が目に入ってきた。
正面には巨大な溶鉱炉。その隣には威圧的なまでの大きさを誇る回転砥石（かいてんといし）、鈍色のどっしりとした金床や金色に輝く鞴（ふいご）など、一目でそれが並一通りの性能のものでは無いことが見て取れる。
その中に一人、こちらに背を向けて一心不乱に槌（つち）を打ち付けている少年を見つける。
「――――ソルト。」
規則的な槌音（つちおと）が途絶えるのを待ってから声を掛けると、ソルトと呼ばれた浅黒い肌に後ろで纏めた白髪が特徴的な少年は操作していたウィンドウを消しながら、こちらを見て苦笑して言った。
「遅いよ、ゼロ。もうみんな二階に集まってるぞ。」
「ごめんごめん、ＯＳのアプデが思ってたより容量が大きくて時間が掛かったんだよ。」
今日の正午にＶＲ機器ランチャーのＯＳアップデートが来ていたのだが、容量をよく見ておらず夜まで放置してしまっていたのだ。
「まぁ悪かった。スマン。――――ほい、いつも通りＳ―Ｄで調整してくれ。」
言いながら腰に吊るしていた愛剣をソルトに向けて放る。それを片手で受け取った鍛冶妖精族（レプラコーン）の少年は、柄（つか）を軸にして器用にくるくる回しながら詳細プロパティを参照していく。
「で、情報収集や下調べは終わってるか？」
自分の主武器（メインアーム）が強化されていく様子を眺めながら軽く尋ねた。
「ウィズが一晩でやってくれました。」
何処ぞのデ○ノートで聞いたことのあるようなフレーズでソルトが返す。
「それじゃあ、その作業が最後だな。先に上に上がってるぞ。」

「正確には一番遅く来たギルマス様の武器の修繕、だけどな。」
「うぐっ・・・・・・。」
じとーっとした目線を背中に受けながら逃げるように端の階段からメンバーの集まる二階へと上がっていった。
「――――お待たせ、全員分の武器の修繕と強化、調整が完了したぞ。」
数分後、そんなことを言いながら作業を終えたソルトが二階へと上がってきた。
「お疲れ様！」お疲れ！」乙！」オツソルゥ・・・」
各々労いの言葉を掛けつつ交換ウィンドウから戻ってきたそれぞれの愛剣、愛刀、愛弓、愛杖、ｅｔｃ・・・を装備する。
全員が支度を整えた所でゼロが口を開く。
「さて、今年一番の大掛かりなクエストへと挑むことになるけれど・・・・・・いつも通りまずはウィズから入手した情報を教えてもらおう。――――ウィズ。」
言うと、後ろから大きくジャンプをしてウィズと呼ばれた、フラグメンツ唯一の情報屋である小柄な猫妖精族の少年が飛び出してくる。
「じゃあ、色んな経路を駆使してこのボクが集めた情報を簡単にまとめるよん。」
そう言って、愛嬌のあるくりくりとした目を細めながら続ける。
「まず迷宮自体の情報だけど、これはみんなも知ってる通り門自体は塔型の全四層構造。内部で湧出するモンスターはほぼ全てが邪神級、上層に行くほど難易度の上がっていく方式の迷宮みたいだね。」
その言い方に何か引っ掛かりを感じたのか隣で話を聞いていたジャックが口を挟む。
「待て、門自体はって言ったな？それじゃあまるで門に先があるみてぇじゃねぇか。」
「ボス、門に先があるのは当たり前だよぉ？」
「やっぱり噂通り門の先があるのか？それとも・・・・・・」

見当違いなことを言うシャドーを無視して同じことを思っていたゼロも問い詰めると、ウィズは透き通るような白い顔をこちらへずいっと近づけてきた。
「その通りだよん。巷(ちまた)では門自体の情報だけが先行してるけど、神話系統の関連ＮＰＣの繋がりを辿っていくと三つの仮定が浮かび上がってくるのさ。」
幼い顔立ちも相まって女の子にしか見えない目の前の少年は目の前でびっと指を三本立てる。
「一つ目はさっき言ったような深淵(しんえん)の門――ギンヌンガガプについての情報だから省くとして、二つ目が門のボスについての情報。確か《大地囲繞(いにょう)す毒蛇》・・・・・・だったかにゃ？北欧(ほくおう)神話(しんわ)で言うヨルムンガンドのことだよん。――そして三つ目。」
そして、そこで一呼吸置いてから最後の一つを続ける。
「これは与えられた情報を北欧神話に照らし合わせると分からんだけどね。この内容が正しければ神話の大系(たいけい)が・・・・・・いや、考えすぎだね。」
何か引っ掛かりを感じているのだろうか。少しだけ自信なさげに続きを話す。
「ギンヌンガガプの門は正確にはメインクエストじゃないの。真のメインクエストは門を抜けた先、闇と氷支配せし地――ニブルヘイムなんだよ。」
「ンなッ！ニブルヘイムだとォ!!?」
ジャックが素っ頓狂(とんきょう)な声を上げる。だがそれほど重大な内容なのだ。一同驚いたように目を見開き硬直する。
「ま、あくまでも仮説だけどねん。」
あくまでも軽い調子で言うウィズ。
「で、脱線しちゃったけどこのクエストの開始点はヨツンヘイム中央南にあるウルズの泉。だからとりあえずここに行ってみればいいんじゃないかにゃ？」
暫(しば)し放心した後、はっと我に返ったゼロは情報をまとめつつ、指示を出す。

「――――そうだな、あまり考え込みすぎても仕方がない。まずはウィズの言う通りウルズの泉を目指そう。」
その後、ウィズから迷宮内の敵の弱点や耐性、その他諸々（もろもろ）の情報を受け取り、シャドーを中心にアイテムの分配まで終了した時には既に時計の針が午前一時を指していた。
先ほどウィズの言ったことが本当であればかなりの長丁場になりそうだが、何しろ今日はまだ土曜日の深夜。時間だけはたっぷりあるので心配は無さそうだ。
メンバー総勢十五名全員の準備が完了したのを見計らってゼロは再び口を開く。
「さぁ、旧ＳＡＯ以来のフラグメンツ全員揃ってのクエストだ！軽く制覇して妖精達に僕達の力を見せつけてやろう！」
おー、と続く断片達の唱和は室内に響き渡り、窓を抜けてイグシティの街にまで拡散されていった。

※※※

時を少し遡り、新生アインクラッド第二十二層の端に建つログハウスにて――――
「・・・・・で、こんな時間に私達全員を説明も無しに呼び出しておいて、何か理由はあるんでしょうね？キリト。」
――――キリトは水色の髪の猫妖精族に問い詰められていた。
たがそれも仕方が無い。キリトがとある目的の元シノンを含めた七人にメッセージを送ったのが午後十一時。週末の夜とはいえ呼び出しをするにはあまりにも遅すぎる時刻だ。
「キリト。まずはお前がこのような時間に詳しく理由も話さず私達を呼び出した、その理由を話してほしいのです。」
隣でこちらをじっと見ながら金髪の風妖精族（シルフ）――――つい最近ＡＬＯにやって来たばかりの新しい仲間であるアリスも続くように問う。
アスナ、シリカ、リズ、リーファ、アリス、シノン、クライン。―

――そしてユイを含めた八人の視線を受けながらキリトは口を開いた。
「――みんな、落ち着いて聞いてくれ。」
そして、躊躇(ためら)うように続ける。
「・・・・・・俺は、ついさっきヒースクリフ――茅場晶彦(かやばあきひこ)に会ってきたんだ。」
その一言に、その場にいる全員が激しく息を吸い込んだ。キリトの口から漏れた《茅場晶彦》――四千人もの人が死んだＳＡＯ事件の犯人の名は大きな衝撃を呼んだ。
「・・・・・・――頼む、俺に力を貸してくれ。」
キリトはその場でゼロと同じく茅場に伝えられた全てを包み隠さずに話した。
――何者かによってＡＬＯが崩壊の危機にあること。
――阻止するには終末クエスト、《ギンヌンガガプの門》をクリアするしかないこと。
――そして・・・・・・それには大きな危険が伴うであろうことも。
キリトが全てを話し終えても、しばらくの間誰も言葉を発することは無かった。
室内に満ちた、永遠とも感じられる数分間の重い沈黙を、クラインのあくまでも明るい声が破った。
「キリトよぉ・・・・・・。お前ェ、ようやく俺らを頼ってくれるようになったか。」
「あのなぁ、クライン。俺の話を聞いていたか?真剣な話なんだが。」
「いいじゃねェか、俺は嬉しいぜ。いつも誰にも話さずに一人で突っ走ってくお前の成長が見れて。」
「だからそういうことよりもだな・・・・・・。」
あくまでも的外れな物言いに半分ほど呆れ、苦笑しながら言う。
そのやり取りに、アスナ、ユイ、シリカ、リズ、リーファ、アリス、シノンの七人は互いに顔を見交わし、揃ってプッと吹き出した。
ひとしきり笑ってからアスナも口を開く。

「キリト君、そんなに抱え込まなくても良いんだよ。」
「そうよ、アンタ、どうせアタシ達が止めても一人でばーっと突っ込んでっちゃうんでしょ？」
「パパの無鉄砲さはＡＬＯイチですから。」
「そうだよ、お兄ちゃん。折角の神話級クエストなんでしょ？みんなで楽しもうよ。」
リズにユイ、リーファまでもが続ける。
「あ、あたしはキリトさんと・・・・・・。何でもないです！みんなＡＬＯが無くなっちゃったらイヤですもんね！」
シリカも何かを言いかけるが途中で止める。
キリトの懸念していたことなど考えもしない様なみんなの反応に若干気圧されながらも乾いた口から呟く。
「みんな・・・・・ありがとう。――――そうだな、折角のクエストだし楽しく行かなきゃな。」
そう言ってニヤッといつものように不敵な笑を浮かべながら、何時ぞやのエクスキャリバー獲得クエストの時の再現のように明るい声で告げる。
「みんな、今日はこんな時間にも関わらず急な呼び出しに応じてくれてありがとう！このお礼はいつか必ず、精神的に！それじゃあ、サクッとクリアしてＡＬＯを救おうぜ！」
今度こそ、おー！という迷いのない唱和が室内に響き渡った。
――――そしてそれぞれの思いを胸に十五人の背教者達と、十人と一匹の妖精達は同じ目的の元、始動するのだった。